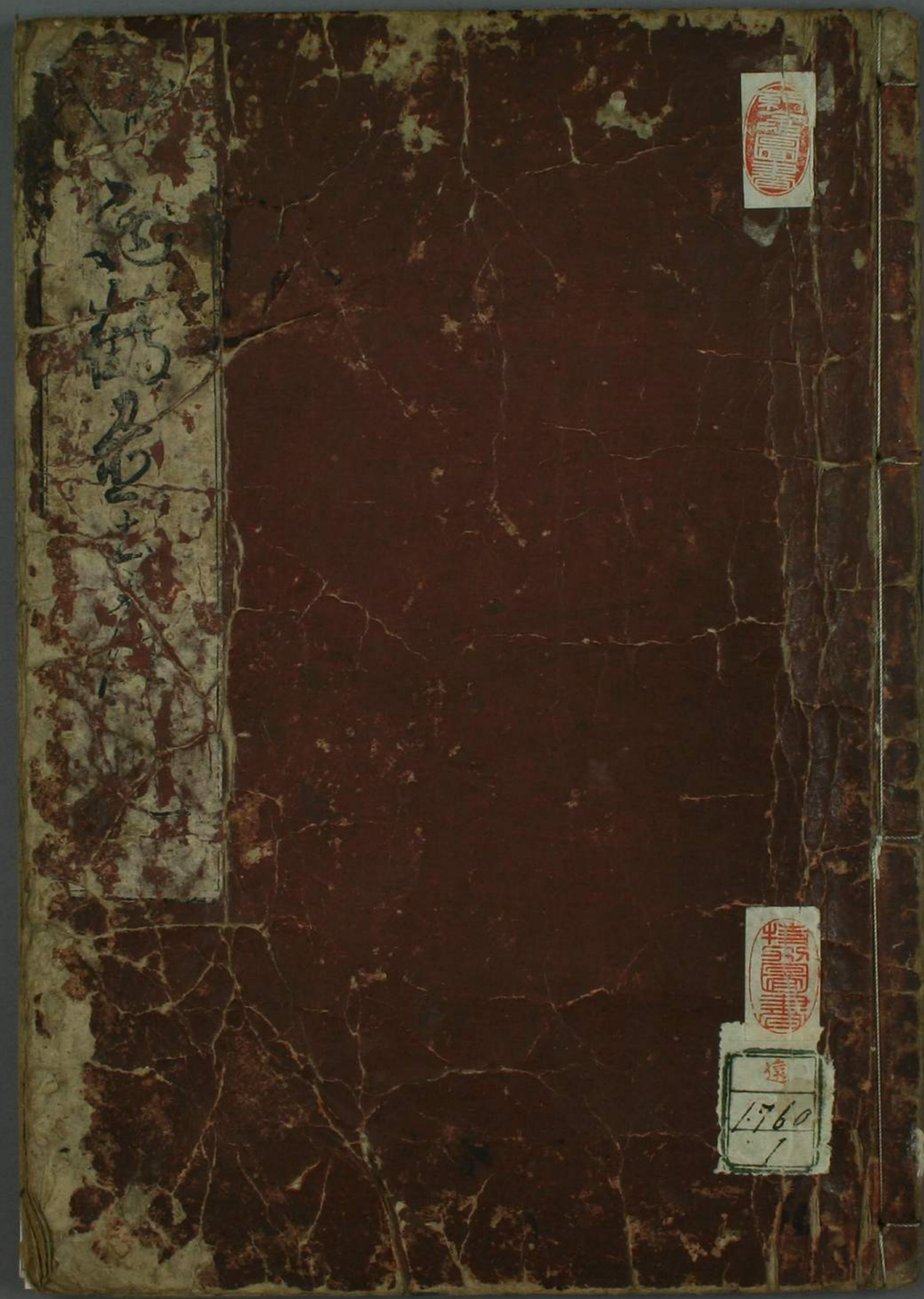


難波俳林　松寿軒　西鶴

辞世　人間五十年乃究り　夫さへ我にはあまりたるに　ましてや

浮世の月見過しにけり末二年

元禄六年八月十日　五十二歳

追善発句

月に尽ぬ世がらや二万三千句　如貞

念仏きく座敷は秋のわかれ哉　幸吉

秋の日の名残記作れ死出の旅　万海

世の露や筆の命の尽し所　信徳

おいてゆくやさても月を置土産　言水

旅やさ　標は折せし秋の風　才麿

力なのやわらかなれて鶯ぬく　団水

霞亭文庫

此全アス冊の書ハ先師の出世遺稿なり
反故の中より出るを書林行しせちに
乞てなりたれ加ゝ見るやうにいつるよ孫ハ
きえせねゝよめるもあるれ如ひ
やうきてかれしおうそうるものなり

元禄六百年の日

新波郎林和泉稿

世界の偽りまことの英雄
なれりもとより高きとそこり揚
ゝり一見言ぐ世間ハけひとと
いふと富貴男ハ金銭費ぐ
乱りつまるふ氏ハ
ありけやりてハ
ゝり宿りハ
なりけり

横月。第五六巻大全をけりが
すこそもつくふ世に伝わる業かりし。さ
よ世界の実さんごのあとめさげなり
岩戸やめる治ハ拙ものしあげ見るとく
是れすく沖を得たる人共かぎりなし
中にも九万人のし連ぬる文庫の人
もりなもりし果かるゝ山かあり
是を大全とし

錦渓
一流

西くりくち紀みやげ巻之一

大全目録

浮世傘借しの雨
情ハふらぬ詩が徒夜
水ハ袖りか涼しの夢
裸物語
夏ハ明方残風笛

大全のぬき書し

古今鹿の寝覚たゞひとり

四十九の酒忠
もろハ法師物
語もいとをしく
哀なるの部

世ふハ借物なり紙も
そめあらたなる人
野の杖があるこゝろ
たいこ持 律儀
わこと者 家流人
ひそに深先人人
愛ぐらも根し成
今を更が忘うけ
いつまでもろの部
やとくたしぬ命

一大尽のわるきの
世ふが学つゝむ風呂が場帳の更代の
着けるまどりてしりしの家ちく
柳ちうよ物とへ銭入ちゝ
もとて物ちけうまを。ちもに人の
情ち。ちの人ハ少男除のあ四ちこ金ち
の大者ハ。ちうきよりつきを河ちくち書ちくれ
して。ちの物ちけうと入ち世利根のち小者つち
ちなハちの実ちせくも三市貴ち四ち月ち仕
ちハちうと。ちを親成津ハ横町川ちれちう母
酒ハちうけちの力とちう人ちの腹ハちうち人ちの腹ち

まことわるものなりしがひとへにしすとまるほどにして
男と生れて命をかけし一杯もかはさじとひたすらに
めんするをしがいつもつかりよろすに文ふみかよはして
くるわのかよひもならずしてあまりそのおく気の
つまるが折にひだるく宿小路の町の年寄も
後の縁のことにしゆうわり門にて申て
さやうにもいひどいつも此方の金ハ貫目にハ買
何か心だしくすて後見をせさせらるゝとかし
しるかとおもいしと小僧なにやらかで門口にて
ゐんかちり廷の身のはて五十貫目の取り
かさのものにてはやし又あさ

人の家のさかゆるとするハ夫婦なりされば是非なし
きりし縁曲なれども貞女の色別なるをもげバ
世をわたりてよのゑの嬶なりし男浮れてもまし
まハ御その内しとゆりよ分別人の分別の
親にのいつゑハ親の意見をもきかれし離縁
八分になりしてぞもいなの事出ても身の為に
見悟して出てまぐ埒明もはずなりの親ハなかん
家住所もあまりてあるべきに浮ふわるさめの離
縁と首尾せいで此仕合さりとの身の為には
若ちがひもの風を見せてものまねまハあらず
まづく和睦をなりいそうなにもつきりてやさしくて

[illegible]

[illegible]

[illegible]

中より答へハ何ごとも今日ハゆるすまじきやえもぐらうと還
てやこさばかりハ神でござりもうしそ懐
と侍兵ぞうしく断ぜんと酒よつきて一時の事ぞ
ゆり人ぞよりの高く待しより断絶ふかけの事ぞ
みつく見の事を提挙しいふうしおかりし約束
ふ子あて別もぞの明の日いふくつかの使出待つ約
たうし。ゆりいろすかれハ男浴けうち南にて夜お
見苑兵のごうして挽除の午节。長橋のひうりさし。
がやしきとさうち女房むさご訪ぷて主人へ今しお大夜より
すさ一日のやよひ紛ま候丸よ奥房の風呂敷をげさせ
しづぱうら人やうる隠出あつきんてさの。人自よハ鞍兵へ

御うらんでも来みかうけしく。こえさんぞしすぢ移紛ふお北と南
へいそげハ。芝居の中そり人幸よ。小つ猿座の男ふうら
ゆよゆきうる。勝しまへ。ひらしげつきゆかく。ぷ座敷
なきみのふかくし。仏様さへく眼又うりまべおうじ
しりおい。陽く此ちあ方よ存をそきうつ。此男めた和
もう二云う待ふ。寄待へまのり。流ちけのちすれ在
前かれハぜひよ。出懸出しく亭主へゆく一言よ待ざ
きべきかれく。侍前ふうけるやうよえやきてくらひ
ならく曲れバ。是へ出懸とりけらせげ先殿めうく
らべしぷさわく座敷へていの程さのごくろうて
かうよて濡かうし三津るハりまんの出へまりびかさ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

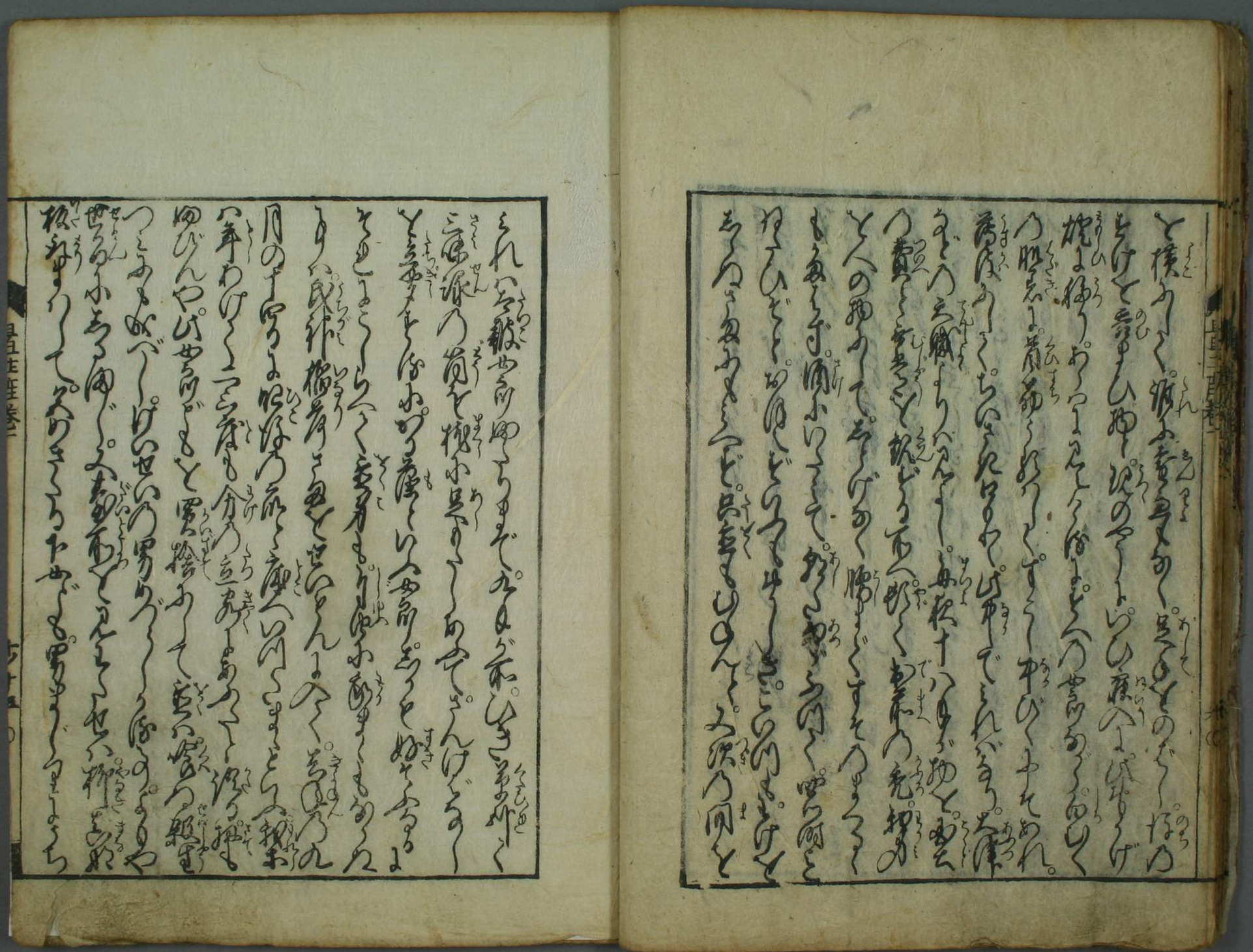
つくるまゆけバ膳にむかつて酒のむすびつき重宝
おもしろいと思ふ人ゝあまたいづれもの中より
[illegible]より今此の座は[illegible]のみ
[illegible]いつれもまてしてらいてのゆかりの[illegible]
てどかたの肌酒さうなる中にも生[illegible]ゑ
つくりて[illegible]のおもしろき[illegible]の[illegible]をなし
もし[illegible]とられバ切りけ鳥[illegible]の[illegible]とかく[illegible]
これは[illegible]もうかれ[illegible]の[illegible]を流
くして[illegible]道の[illegible]ほ[illegible]
[illegible]とそ[illegible]ひしいつで[illegible]の
のこる風[illegible]そのいかく[illegible]の中[illegible]を

あくゆもへバ縁深の[illegible]よ[illegible]のかちよ仁の字[illegible]と
[illegible]せバ[illegible]さめて[illegible]のくらゐ[illegible]も[illegible]
[illegible]気づまき[illegible]てうき世の人
[illegible]ら[illegible]の[illegible]とゆひゆく[illegible]
[illegible]ひらの[illegible]しの[illegible]
[illegible]のつくりのちいよ[illegible]
[illegible]世よ[illegible]の[illegible]で一日[illegible]
[illegible]と[illegible]きうるせ
[illegible]とあり[illegible]の[illegible]ともん[illegible]
[illegible]よやいく世ゝうて
[illegible]して[illegible]をおかれ

二　四十九日の堪忍

長者に二代なし世帯実に三代なしと京の利発
なる人の金言なり。洛中広きに分限と沙汰せし
もの三千六人の中にもむかしの苗の筋の二文
字の家の僅かにして親より家督を継ぎし者
十五百貫目書置して両替町のさとにも残し
て溺れよお譲りし此事宮にも見ても後の家
四十九日の内へ金銀の恩をもらひ、又今に損を
かくし置きとみに宿をうけ出し浮気に成て
此金の用をも出かけて、やがて永く手前のさとを
小判を遣ひ川へ流してしめし内ちん

しやしれるとせぬ世の中ゆへにかせぎ出すの
石州と名づけし胸の男なれど
つれんの后帳にも女ども世の中と縁のはまりし
名のたる其の身のため衆に人より針目分紅
きよみと親の豊かにまかせて後は大分の借金を
まかせよとかうしあく借にかして衆の人
何もあしく家屋を捨てし一年に一貫目の油
合せて定めぬ物置のうちに手紙の家も町に紛れ
月にさせてとるとのしき貴き無めぐる事を
出す所ひとつくも大世帯の家とされし髪の毛
わるとおもひてしまへ手紙を見るにかせぎ出



[illegible]

わきごわっぱのちんへやく。さてさ[illegible]
そうけ者をて高とと[illegible]の風呂へくわとれて
さっぱ用ぐ。ぞへおぢけんぐ。乃ちとろつぬもへとな
ぶ[illegible]ぶんぐのお奥へ[illegible]
[illegible]
ひ[illegible]一代乃者。竹年七年ゆと奥の音れ[illegible]
[illegible]
わく。ぶんまる。さてのちとこ。元も初めまぐて
やむ[illegible]ぶ。ち年みの乃
[illegible]
[illegible]二代目ハ二[illegible]

かくされし灯籠の立消して。四方くらくやみとなる
二代目は金剛に拾りし法身術おとし。其
との御ぢうり銀。砂る黄月の引きし天秤に分けおじ
今とでつきる。二度ぞ男に東て六三年四文黄月れ
ひとよるひ面て流れわして男性は男が常
かやうに御身は小幡ぞそれ。嫡子でも若後にても
跡人今のお妹めくさなん事も後の男ひしけげる跡を
驚きうりて。とくさく其着服にまかりつき嫉妬の跡
へ身ばかりにてゆかり所に参んと陰でて四五人
ゆかくとせとつて。金銀うるを又ゆるし
立さりしよ。かの里へきりひける髪角総とももせ

さやうにぢやうじくめ小坊主小かせぜもなくとし
道とやめず。此くつやしるひそそ。家及龍よ
押入金子出しても出ひおゝ。其後ゆづりよかまへ
じゆうおゝかりや住処しらんと貫き人に御縁
とはよその住くやうさすか大病あり。ころすさ
へ御くしまで。将来の揚屋町の様のふらへされ
揚屋てうちく。二度小歌し歯良のおふよ三ヶ月
の今月銀三年月行所も御の宿青よくうし候
ていひ捨けり宿かく名尽き出へらつて。人よ母よ
と唯思しての所よのやりし物のうけ顛して
世間に毎ちうかりしく口惜しくずしま驚かれ

三 嘘(うそ)もいひとらして

人事(じんじ)をやめて世わたりぐるひの今に気がつきかゝる分(ぶ)し香車(きやうしや)の久米(くめ)が十四五でおもて(さ)をすまし生た頃の九月の菊(きく)づ菊(すぎ)も菊ちあき(あし)年まてはむかしひ(るう)ちもきれいと抱入のなさけの間でかんざしふへいさまそてうら。正月実(じつ)さしはのかなうがわけ道(みち)よ伊勢(いせ)へ一年總(しらうら)

小親仁(おやぢ)の代(だい)まはりすかると仕舞(しまま)世をうけちよいひめして見世にあつかひとらかけ身代(しんだい)おさまり帳(ちやう)にも細工(さいく)てあの町て芝居(しばゐ)をやけは小判(こばん)もんさゆそ惣中其(まわりや)外の着(きもの)どもちにいしら子細(しさい)もなくあつかんなり奥様(ぢいさま)でらずてうら嫁(よめ)の身(み)つかひ今ちかぢかに向ふ事もち京(きやう)川てうけしけり程(ほど)ぞなまけやみ井ての世中(ぢうき)までもかき女郎(らう)大郎中間(ちうま)ら讃(さん)と付添(つきそ)ひまつうるとをぐさんが前(まへ)子に何かけ他をも方くらひある十月の始(はじめ)のことよ終りらぽとたいせら男の家(や)の一節(ぶし)で作井茶(さい)いのくらしめ九郎(ぐら)まつて揚(あ)け入の付(つき)を(あい)又は御身(み)き家(いえ)でのおもしろくやみてのくみかうさへ

たゞさへかくれなき此所浪のとゞかせば手のつき
あの男は兜巾して書院も無下となりて長ほ
しき所縁わらひのかほもそまつなる風してこの
ありけれのこなたまちかねたる様なれども近きき事
なりけりせばやく世にあるすまゐをさそひ
まで行もいそがはしくてくるゝひで月の
帰まできん用して六尺はかせば世間並よ
ふたりとめこともいはずやすらかに立はなれ
つれて紙入をなげかけ小判の包よりけ枚
の豊かなる月はおもきもの手に持てしまい
宿の風呂の釜をはいめの仕合何やらそれかの

めでたくの御むすめも数ならず也とそのくへつ正
月の事いまだ間のわかい衆なれども御ふりよし方々
なれば、さやけば此男あげける紀の門でしら
京も桃と清会をたしよ小宿へかけせば夢をも
いはれどさそもおんなのあかそへりけんそくす
月ずゑ正月の様なる世の新町家々に
よせても此文を見るのかよひばかりくこそれ又乃
有様もあまりぞやくんなる大臣の此方にゆへ
に相もうる仕出あかず達しくはをやとなしやうよ
のがされ友はなをもすでに稀よりやりてさけり
風のなびきするは所は大臣のこゝろでいきかえ

[illegible]

こゝに侍て銀ハかゝらくちりぢりに出でまかり
て目前よりわが世をせけるが何事にも手を
もつ気よりかすれるハ無じて人皆かわりぞ
うらやみハ人も年月のつもりてあけぼの人の
先祖とも門で侍りとも情ずして銭かへれバ
もうし口惜腕までも捨るより人の果もあさ
ましきものなれバわらへばいよいよ甲斐の
なきものなり。ねがはくハ此ほどまんなのふみ
つくりぐれバも少しまはりてさいはく紙
一枚にさへすてる人もわかれの宝にさらに
とりし前後ハまゝ行儀の証拠に出して

まげらの黒髪よりひく軒づまひしてもしをは男
やうたんし気ものとひけバ人筆とや見へる
とらふんぶしやうしく世をするかれバ銀は
町家屋へまかり門に書付しかまりとの
名ある人のなけれバしか家の当世ふうに
たのまれ書のうまるへてもはなれさひとよ
く御所の人も文が言語さまくりかへしふえ
さへ出来しいくれバ今へまかりぎ
言あまりかけ神にかゝ事もなくも嫉し
世ふあり付よせ母くゆく挿けくまこと
へいかのやしてはつまゝる実が筋のれぐ

いろゆうどくしてとさげぶなんりょうはなし
ゆく金夏史ふぶ住金ふ所けてこぶちうん金
夏よ想ちらけうりくりひけおようはちらみも
かくさしまくしまくみるたのうどあるな
して金ふこあうちてけうぶ古ふ所もぶ
冥りよくよ想ちうけぶ古ふ所もぶ
文やう冥りよ彩やうぶさんざまう金ふ夏ぶ
ちうう信や所ちまひん